学術

# その時々の社会を映し出す鏡としてのパンデミック

## 感染症が社会に与えた影響を縦糸に、また、感染症理解の発展の歴史を医学哲学の変化に見出す営みを横糸に、疫病のタペストリーを織りなす

山本太郎

フランク・M・スノーデン 著
桃井緑美子・塩原通緒 訳

▶**疫病の世界史 上・下**
(上)黒死病・ナポレオン戦争・顕微鏡
(下)消耗病・植民地・グローバリゼーション
11・18刊 四六判総840頁 本体各3000円
明石書店

著者は書く。「パンデミックを引き起こす微生物は、人間が用意してくれた生態的地位を埋められるように適応した微生物なのだ」と。それはパンデミックがその時々の社会を映し出す鏡のような存在であること、結果として、そうした社会への懐疑を通して、社会そのものや、哲学、あるいは芸術を刷新してきたことを寓意する。著者はそれを、パンデミックが人から人へ伝播するという感染症の感染症としての特徴にあるとする。

本書は、感染症が社会に与えた影響を縦糸に、また、感染症理解の発展の歴史を医学哲学の変化に見出す営みを横糸に、疫病のタペストリーを織りなす。

第一の例としてまず、一四世紀半ばの中世ヨーロッパにおけるペスト、黒死病が取り上げられる。黒死病とは、腺ペストによって皮膚が出血斑で黒ずんでみえることから名付けられたが、著者によれば、その名が使われ始めたのは一八世紀に入ってからのことだという。いかにペストが長くヨーロッパに人たちの記憶に影を落としていたかが窺える。

ペストはまた、貧者、富者、あるいは若者、老人の区別なく社会を構成するすべての人々を分け隔てなく襲った。それは、主に小児が発症した天然痘やポリオなどの感染症と異なる流行様式であり、それ故に人知を超えた出来事にも見えたという。そしてそれが当時の人々に審判の日の到来を思い出させ、強い信仰の発生を促した一方、死というものと折りあいをつけるために中世の人々が有していた受容ともいえる概念を打ち壊したという。ペストは突然の死を強いた。罪を告白することも、聖者に立ち会いを求めることも、あるいは葬儀を営むことだけでなく、まともに埋葬されることさえ人々から奪っていった。それは共同体の絆を断ち切るものであり、必然的に人々の「生や死」に対する考え方に影響を与えた。芸術はそれを表現するための方法を模索した。中世ペスト後に描かれたペスト絵のなかには、金や豪華な衣装と同時に消えかかるろうそくや砂時計が骸骨と一緒に描写され、現世の生ははかなく無価値だということを表現するものも多くなったという。

ペストに対し、ヨーロッパ社会は二つの相反する対処をした。悪魔がペストを引き起こしたとすれば、ペストに対処するのは悪魔の手先を罰することとなる。矛先はユダヤ人や少数民族、あるいは社会の嫌われ者に向けられた。流行病はいつも贖罪の山羊を探す行為と結びつく。そのことを私たちは学んだにもかかわらず、今回のコロナ禍でも同じことが行われた。

一方、ペストの原因が、神の怒りであれば、それを鎮める必要がある。ムチで自らの身体を傷つけ苦行し神に赦しを乞う人々も現れた。

また、ペストに対する公衆衛生上の対策は、人々に国民国家を強烈に意識させるものともなった。陸上での隔離にせよ、海上での検疫にせよ、それを実施するには国家という権力やそれを支える警察や軍隊のような力を必要とした。それは国家というものによる人々の生活に対する新たな介入であり、権力の拡大を正当化し、市民の自由の剥奪を是認するものになったと、著者は述べる。このことは、自粛警察やマスク警察が現れた現代においてこそ、多くの示唆と注意をもたらす。さらに言えば、疫病、特に致死率の高い疫病に対する隔離は、隔離されなかった人々を守る公衆衛生対策である一方、隔離された人々には死を意味するものともなる。コロナ禍で、パンデミックの初期、ワクチンも治療薬もないなか、隔離しか対策がないとき、私たちが驚愕したのはまさにそのことだった。

第二に取り上げられた疫病は、黄熱と赤痢、発疹チフス。戦争と疫病の関係について、ナポレオン時代の二つの出来事、すなわちナポレオンのロシア遠征とカリブ海の植民地サン・ドマングへの派兵を例とする。ナポレオンのロシア遠征は赤痢と発疹チフスによって、サン・ドマングへの派兵は黄熱によってその野望を挫かれた。疫病が戦争に及ぼす影響を示し、その帰結としての戦争の趨勢が歴史を変えたと著者は書く。

第三の例としてはコレラが取り上げられ、疫病の流行を規定するのは、病原体そのものではなく、社会や経済、政治、そして環境条件だと説く。コレラはガンジス川とブラマプトラ川のデルタ地帯で、長く風土病として存在していた。そのコレラが、一九世紀にヨーロッパへ達し、パンデミックを引き起こす。決定打となったのは、イギリスによるインドの植民地化とそれに伴う、経済活動の活発化、人の往来であった。そうした社会変化があってこそ、繊細で長旅に耐えられないコレラ菌が世界的に流行することになったというのである。そこに、産業革命以降ヨーロッパで、急激に起こった都市化と人口の増加が流行に格好の土壌を提供した。中世ヨーロッパで最も恐れられた疫病がペストだったとすれば、一九世紀のそれはコレラだった。そのコレラは、結果として上下水道の整備を通して公衆衛生対策の向上に寄与した。

その他の疫病として取り上げられたものに、結核やエイズ、マラリアがある。現在でもアフリカを中心とする開発途上国で多くの死亡者を出す公衆衛生上の重要課題である。一方で、疫病としての成り立ちはかなり異なる。結核が産業革命後の社会情勢を色濃く反映した疫病だとすれば、エイズは二〇世紀初頭の植民地化やそれ以降のグローバル化がパンデミックとしての成り立ちを彩る。一方、マラリアは人類にとって最古の疫病の一つである。それが現在のアフリカで大きな被害を出す。根本的な解決策は感染症対策、公衆衛生対策への投資と環境保護であると説く。大いに肯首するところである。二一世紀は、薬剤耐性菌の問題も含めて再び感染症が公衆衛生上の課題となるに違いない。そんなことを考えさせられた。

著者のフランク・M・スノーデンは、イェール大学歴史・医学史名誉教授で、一九七五年にオックスフォード大学で博士号を取得している。専門はイタリア史、ヨーロッパ社会・政治史、医学史である。「疫病の世界史」の原題は「Epidemics and Society : From the Black Death to the Present」だから、直訳すれば「疫病と社会：黒死病から現在まで」となるだろうか。個人的には、二〇〇三年から〇四年にかけて現地の研究所で研究を行いつつ暮らしたこともあり、ハイチの記述には思うことが多かった。

(長崎大学熱帯医学研究所教授)

思想